

連載「健康まちづくりとは何か？」

第2回

「まち歩き」を中核にした総合イベントの可能性（その2）

上田昌文（NPO 法人市民科学研究室・代表）

●ブラタモリの人気の秘密

NHKの番組「ブラタモリ」が人気だ。この番組の影響で、古地図を買い求める人が増えたとの噂も聞く。いろいろな魅力的な散歩・旅番組があるなかで一筆者も日テレ「ぶらり途中下車の旅」を欠かさず観ている者の一人だ。この番組が特別な魅力を放っているとすれば、それはどうしてか。

いくつかの理由があると思われるが、おそらく大きいものの一つは、いわば「観光者」としてではなく、「探偵」としてまちを巡るという、探求的な姿勢で番組が作られていることだろう。もちろん観光の場合も、名所旧跡や名店など、その来歴を詳しく調べれば興味深い事実がいくらかでも掘り起こせるのだが、観光という一過性の体験においては、（ガイドブックに記されたような）定番の情報を自分が表層をなぞるようにして追体験するというのが、主だったスタイルとなりがちだ。「まちのあり様」について、解くべき「謎」ではなく、確認すべき「答」が先に与えられる形となり、それも関係して、「観てきました／行ってきました」という事実を他人と共有することに比重が置かれることにもなる。

もう一つは、古地図を活用して地形や今の街並みから「まちの成り立ち」を読み解く術を伝授しているからだろう。普段私たちは「地図」を街の中の特定の建物や場所を探し当てるための平面の情報として利用しているわけだが、特定のまちに着目して、古く遡った地図を重ねてみると、そのまちを形成するのに与った地形の条件、人口の動態と居住域の変化、それらと関連して成立したであろう産業の様相、都市計画的な政策の影響、宗教や文化の関わり……等々、「なぜここはこうなったの」と古地図を指差してその変化のワケを問うことで、いくつもの「謎」が立ち現れる。それを解く手段はまったく一様ではないが、まちの古老や郷土史家らを訪ね、様々な文献にあたり、推理を働かせながら現地を巡り歩くことで、その「解」に至ることがある。ブラタモリは、おそらく事前の綿密な下調べをふまえてなお、撮影当日にライブ感覚が出るようにしながら、「謎解き」をいくつも織り込んでいる点が、画期的と言えるのだろう。

●「防災まち歩き」からみえること

じつは、「ブラタモリ」の探索的姿勢を保ちつつ、「名所旧跡巡り」の観光でもなく、主軸を歴史の読み解きに置くのでもない、まち歩きが、私はあると考えている。それは「まちを知る」ことのさらにその先の何かを目指したものとなるだろう。

例えば、今各地でいろいろなやり方で試みられている「防災まち歩き」。

ハザードマップも活用して、広域避難所や一避難所、まちの様々な地点に配された防災設備、自治会・町会の消防団の所在地を巡りながら、一旦大きな災害が生じた場合の避難ルートや救助・救援対策を想像してみる。その際に、歩きながら目に入ってくる、住宅や道路・路地、様々な建築物やインフラ施設などを「これは地震や津波に耐え得るのか」「火事が起きたらどうなるのか」「避難路は確保できるのか」…といった視点からとらえてみる。チェックすべき事物を写真に撮り、防災に関わる行政の担当部署の役人や消防団などの話を聞く。そうした多岐にわたる観察と要所要所での聞き取りをふまえて、まち歩きに参加した者が一緒にまちの防災のあり方について議論し、防災意識の向上と防災対策の具体的な改善につなげる。

ここには、「まち歩き」が持っている総合的な機能性が端的に現れているように思える。すなわち、第一に「机上の知識（例えば行政の「防災計画・対策」や災害の科学的知見）」を「具体的な行動」に展開させるために、どうしても必要となる、「本気で備えなければこれはまずいぞ」という切迫感が生まれる。また第二に、「計画・対策」の不備や運用の難しさを自覚することで、行政へのおまかせから脱却した住民と行政、あるいは住民どうし（地元の企業や事業所なども含まれることがあるだろう）の「共助」の姿を思い描くきっかけになる。そして第三に、1回のまち歩きはせいぜい長くて3時間程度で終わらざるを得ないだろうから、「エリアやルートを変えて何度も実施する」という継続性が求められることになり、そのことで、より多くの住民が参加していくことになる。別の言葉でこれらを整理するなら、「住民自身の防災意識」が高まり、「防災における住民の主体性」が強まり、「防災活動への住民の参加」が広がる、ということになるだろう。

そしてこれを敷衍するなら、まち歩きは、やりようによっては、“我がまちに住まう意識”（＝「自分のまちはこの先どうなってしまうのだろうか」）を高め、住民どうしがつながりながら事にあたることの可能性を感知させ、またそうなる人を次第に増やしていく、という「まちづくり」には欠かせないだろう効用を持つ、と言えそうなのだ。

●医療・保健・福祉が「まち歩き」とどう関係するのか

「防災まち歩き」にみられるような「まちづくり」の指向性を持ったまち歩きは、防災に限らず、解決や対応を迫られている社会的な課題群のいくつかの分野に適用できるのではないだろうか。その一つが医療・保健・福祉など、いわゆる公衆衛生や厚生に関わる分野であろう。

地域には病院や診療所をはじめ様々な医療機関があり、利用する側の住民からみれば、そうした施設が存在が知られている度合いは、住民の利用度にほぼ準じると言えるだろう。しかし、それらについても、「大病院がある地域とない地域の違いはなぜ生じたか」「総合病院か、それとも何か特別な機能をもった専門的な医療機関なのか」「大病院とその周辺の中規模病院や個人診療所との関係はあるのかないのか」「地域の保健所や保健センターとの関係はどうなのか」……といった点になると、明確に答えられる人はそう多くはないだろう。さらに、「この大病院の前身は？」「江戸時代にも診療所はあったと思うが（あるいはなかった？ お寺が担っていた？）、誰がどう維持していたのか」「病院や診療所の開設と医学部の成立、医師国家資格の制度などはどう関係しているのだろうか」といった点になると、医学史をひもとかないと簡単には答えられないだろう（文京区内には[順天堂大学 日本医学教育歴史館](#)という素晴らしい

しい施設があり、そうしたことを一挙に学ぶことができる)。

また、ここ20年ほどで町のなかに新規開店する薬局(「ドラッグストア」ということが多いが、「薬局」と何がどう違うのだろうか?)が妙に増えたな、という印象を持っている人は多いだろうが、ではそこにスーパーで置くような加工食品や菓子類を置くようになったわけや、調剤薬局がその中に入っていたり、独立していたりするの、どういうわけなのだろうか……といったことを説明できる人もそれほど多くはないだろう。薬局のなかには、古くか営業しているところもあり、そのお店が「健康よろず相談所」を兼ねているといった趣でまちに溶け込んでいて、店主はそのまちのまちづくり活動の担い手の一人だったことがある(文京区で言うと、私たちが訪問させていただいた[「芙蓉堂薬局」の三代目の川又靖則さん](#)がまさにそうだ)。じつは「かかりつけ薬局」―「行きつけ薬局」というのが本来だろうが―は、いま、コミュニティヘルスの増進への貢献が期待される重要な役目として注目され始めている(参考：[「日本コミュニティファーマシー協会」](#))。

●高齢化社会と福祉の問題を考え、活動に参加するきっかけとして

医療や保健に関わる施設は、むろんこれらだけではない。話を福祉にまで広げれば一介護や認知症や看取りといったことで、医療と福祉はどうしても重なりが出てくる一次のような高齢者のための施設があるのだが、あなたはこれらが何であるか、その違いを説明できるだろうか？

高齢者あんしん相談センター、介護老人福祉施設(特別養護老人ホーム)、特定施設入居者生活介護(有料老人ホーム)、介護老人保健施設(認知症高齢者グループホーム)、デイケア施設、デイサービス施設、高齢者住宅サービスセンター、高齢者向け民間アパート借り上げ住宅……等々

さらに、これは文京区に特異的なことだが、大きな大学の医学部とその大学病院、そしてそれらが集中することと関連して成立している医療機器メーカー群の集積という現実がある(参考：[文京区医療機器産業地図](#))。多種多様な医療機器を販売する多種多様な問屋などが数多く生まれ(湯島・本郷エリア)、機器製造所と医学部・病院を結んでのネットワークを築いてきた。「いわしや」の名称からも想像できるように(参考：[「いわしやの起源」](#))、その歴史は江戸時代にまでさかのぼる。現在は、[「公益財団法人日本医療機器センター」](#)や[「商工組合日本医療機器協会」](#)などが組織されて、行政(厚労省など)の施策に対応しながら、医療機関への医療機器の調達や医療機器メーカーでの研究開発の支援やコーディネートを担う、といった体制もできている。

こうした諸施設・諸事業所の地理的な分布をたどりながらまち歩きすることは、「我がまちはどんな医療・保健・福祉サービスがまかなわれているか」ということの、全貌ではないものの、それを思い描いてみるための積極的な動機付けを与えるような入口を、提供することになるだろう。

高齢化が進んでいる現在、誰しも自分の家族や周辺の知人・友人で介護を必要とする人の一人や二人がいることはあたりまえになってきている。今述べたような医療・保健関連施設を、まち歩きの途中で訪ねてみたり、関係者にお話を聞いたり、あるいはまち歩き参加者の間で議論をしたり……といったことをする機会があれば、自分の住まう地域で「何がなされているか」「何ができるか」「何をしなければなら

ないか」といったことへの認識と問題意識が高まるだろう。場合によっては、地域医療やコミュニティアの新しい息吹にふれ(※)、自らもそうした活動に参加するきっかけを得ることにもなるかもしれない。

まち歩きは、うまく仕組むことで、防災や医療・福祉をはじめとするかなり多様な分野において、「地域からの課題の解決」につながっていくような気づきを与えてくれると言えそうだ。そして、当然のことながら、まちは防災や医療・保健などに限定されない多様な領域の事象を読み取れる相貌を持っているがゆえに、課題の解決に往々にして必要とされる、分野や役割を横断する柔軟な発想やひらめきも、まち歩きで体感する「まちの多様性」に触発されて、生まれてくる可能性があるようにも思える。

※この新しい動向について、各地から実践携わる方々を招いて、その意義と推進のノウハウを学ぶために、2017年3月4日次のワークショップを開催する。ふるってご参加いただければありがたい。「資料」として掲げている報告もお目通しいただければと思う。

[ワークショップ「まちの元気・まちの健康を創発する住民交流とは」](#)